
とある週末。

上口司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある週末。

【Nコード】
N6532J

【作者名】
上口司

【あらすじ】
急な休みを持て余していたサラリーマンの僕。
手持ち無沙汰のまま家で呆けていた僕に、中国から帰国した昔の女
友達から電話がかかってきた。

（前書き）

政治系のネタを含みます。嫌いな方はご遠慮ください。

どこまでも続くひしゃげた家屋と瓦礫の山の上で、子供たちが輪になって躍っている――

そんな夢を見た。

目覚ましが鳴る。

毎日六時起きだが、やっぱり朝は辛い。

今朝の目覚めはあまり良くない。

毎年この時期になると寝つきが悪く、浅い眠りの中で悪夢にうなされることが多い。

大体多いのは、遙か上空へ燃え上がる火の手、血相を変えて逃げまどう人々、いつ倒壊するか分からないビル、などなど。

いずれにせよどれも饅えた匂いのする廃墟のイメージである。

ベッドからとりあえず半身を起こして時計のスイッチを切ると、外から騒がしい音が聞こえた。

眼鏡を掛け、換気も兼ねて窓を開けることにした。

カーテンを半分だけ脇へ除け、金属のフレームに手を掛けて、一気に開く。

急に入ってきた冷たい空気と太陽の光が顔を撫でる。

十一月に入ってから肌寒くなってきた。薄い布団一枚だと、もう耐えられない季節になってきたかもしれない。

ほどなくして騒音の原因を特定した。

やはりあの街宣車がまた元気よくアパートの前にある通りを走っているようだ。一台や二台ではないらしい。

東京に住んでいるのだから、こんなのいつものこと——だよな。
ここの所は特にうるさいが。

雲の隙間から洩れる光線が揺らめくのを眺めながら、日常の些事や
ら何やらを思い出す。

徐々に冴えてくる意識のなかで、この日は仕事がないということに
気付いた。

一応全国的に休日らしい。

今日は金曜日だ。

寝ぼけ眼のまま歯を磨き、冷蔵庫を覗く。

中にはミネラルウォーターが横づけの棚に置いてある以外、ほとん
ど空に近い。ホテルみたいだ。

買い物に行かなきゃならない。

朝食と、今日一日外に出なくてもいいだけの食料を手に入れる必要
があった。

善は急げということで、僕は近所のスーパーに出かけることにし
た。

急に仕事が休みになって、今日一日は本格的に暇になりそうだ。

サラリーマンの僕にとって、この手の中途半端な休日というのは
一番困る。ズバリすることがないからだ。

いつもなら髪をセットしたり、服を選んだりで結構出かけるのに
時間を掛けるのだが、今日は一人である。というか、友だちの多く
がなぜか出払っている。

明日もまだ休日だというのに、友人たちは今日から出かけるらしい。
中には次の日の朝まで飲み会だと言っているのもいたし、千代田区
の南の方で三連休ぶっ通しで開催される予定の集会に行くと意気込

んでいる人もいた。あの辺りは何も楽しくないと思うのだが、止めずに放っておいた。

みんな週末の予定が充実しているらしい。

肝心な自分は、どこに行くつもりもなかった。

僕に週末の予定はない。

仕方なく僕はジャージを着て、頭もとかしただけで外へ出た。

50ccのバイクで颯爽と道路を走る。カッコよくない。

脇目に道沿いの建物を見る。都心だということにも関わらず、ビルだった場所が「入居者募集中」の看板と虎ロープで囲われた空き地や、まばらに自動車置いてあるだけの駐車場が目立つ。

杉並区の周辺は十年ぐらい前まで閑静な住宅街として有名だったらしいが、今は閑静というより寂れている。90年代の経済危機の時みたいだ。

通勤ラッシュの時間なのに通りはガラガラで、四車線以上ある道に走っているのがせいぜいバスと車数台ときた。

故郷の街でも、ここまでひどくはないはずだ。

日本が誇る大都市の一つと呼んでいい街の郊外に住んでいた僕は、東京に来てからも人ごみに物珍しさを感じることはなかった。

復興はやはりこちらの方が進んでいるが。

財布の中身が千円を切っていることに気がついた。

ジューズを買うだけで、こんなはした金は底を尽くに違いない。

僕はバイクをそのまま五分ほど走らせて、シャッターの下りたビルの横にある無人ATMに寄った。

隣の銀行はなぜか人でごった返していて、窓口は全部閉まっている。今日中に来る必要もないだろうに、と、抗議に来ている人達を傍観

しつとも人ごみをかき分けて列につく。

十分ほど経ってようやく機械の前に辿り着いた。

預金通帳を見て残高を確認すると、三万円ほど引き出した。

自分は僅かな収入で今まで賄ってきたが、最近よく電話を掛けてくる親は、「家は人と比べて土地やら何やらがあるから資産運用が大変なのよ。こんなものの全部売ったってどうせ紙切れになっちゃうんだから」という旨の話しを謔言のように口にしている。

他の人も大変だと思うのだが、幾度となく同じ話を聞かされるので敢えて黙って聞きながらうんうんと相槌を打つことが多い。そろそろ今後どうやって食っていくかを考えないといけない。

やつのことで店についた僕は、何故かまた人の多いスーパーで買い物をした。

陳列棚を舐めるように見て回ったが、安い商品は見当たらない。米も野菜も相変わらず値上がりが続けていて、どの値札にも0が幾つも書き殴られている。

特売の二文字に反応して振り向いた先には、所せましと並ぶ生鮮食品。

氷水の入った発砲スチロールに浮いた秋刀魚と目が合った。

濁った眼がこちらをギロリと見つめている——気がした。

でも魚なんて調理もめんどくさいし、高いので買う気もなかった。

レジに並びながら溜息をつく。

一日分の食料に加えトイレトペーパーなども合わせて買ってしまったので、この日も財布の中身を使い切ってしまいそうだ。

周囲の家族連れの中には、籠を三個も四個も持ち込んで食料や生活雑貨を大量に買い込んでいるのを見た。どこかへ出かけるのだろう。有り金を殆ど使いこんでしまった僕は、がっくりと肩を落として店を出た。

帰り道。

今日はいつになく物思いに耽る。

昨日の会社でのことが響いているんだろうか。

オフィスの空気はいつもと少々違った気がする。

課長も昨日に限って、「残業はしなくていいから、今日は定時で帰りなさい」と言っていた。

午後7時を回ってから、同僚と飲みに行った。

彼らは酒が入ったこともあって偉そうに政治談議をしていた。

もう少しお上を信用したらどうだと思うが、同僚もこぞって「日本のはもうダメだから、アメリカの会社へ投資信託を始めるよ」とか、「いつでも海外へ移住する準備できてる」とか、この貧しい僕へ向かって誇らしげに語ってみせるのである。

宝石も金塊も興味はないが、この頃どうもてはやされている感が否めない。

尤も、家族も財産も何もない僕には関係ないことだ。

ゴミの浮いた汚い神田川を眼下に、将来について考えながらもバイクは進む。

気がつくと、スーパーに行くだけなのに一時間以上辺りをふらふらしている自分がいた。

かなり経ってから家路についた。

ドアを開けてさほど重くはないスーパーの袋を片手に、靴を脱ぎながら部屋をぐるりと見渡す。

男の独り暮らしなんてゴミ屋敷でナンボなのは分かるが、これでは汚すぎる。床に散らばった荷物の整理と簡単な掃除をすることにした。

朝ご飯を食べないまま、午前八時を過ぎる。

いい加減に腹が空いたので、冷蔵庫からさっき買ってきた野菜を出

して、油を引いたフライパンで炒める。

そういえば、「玉ねぎにキャベツ、それからもやしとかつて、塩振って油で炒めるだけで料理っぽくなる」というのは、大学時代の先輩の口癖だったっけ。

野菜炒め、合成調味料のスープ、そして市販のパンが今朝の朝食だ。

酸化して黄色くなった緑茶を飲みながら、僕はワンセグでテレビをつけた。

携帯の小さな画面の中で、ニュースキャスターが何やら一生懸命喋っている。

「首相官邸では午後二時より、今夜七時より開かれる日米首脳会談で議題となる、今後の日本政府のあり方についての与党の最終的な意見調整が行われる予定です」

「成田空港では空の便に空前の遅れが生じており、関係者らの記者会見によると機体の異常が原因とされていますが……」

「先ほど首都高大橋ジャンクションで発生した事故により、およそ10キロの渋滞が発生している模様です。本日関東地域での事故件数は東名高速川崎インター附近等の接触事故も含めると23件に及び、国土交通省は本日中の移動を控えるようにとの異例の……」

「では現地の田中記者が、現在霞が関で行われている大規模な……」
どこの局をつけてもニュースばかり。

六、七時台のニュースは分かるが、それ以降にもニュースをやってテレビ局は視聴率が取れるのだろうか。主婦なんて、共働きのこのご時世に少ないはずだ。

まあ今日は何の祝日でもない休日だけれど。

そのまま十一時を過ぎてもニュースを続けるテレビを尻目に、ノートパソコンを起動した僕は、某巨大掲示板サイトにアクセスする。案の定祭り状態だった。いつもならこの板ではあまり見ないOFFスレも乱立している。

「メシウマ」だの「ネトウヨ涙目」だの、極端に右傾化した人々を煽る書き込みも多い。

動画サイトの方も行って見たが、ロードが遅い。

休日だからアクセスが集中しているのだろう。そして何より、荒らしさんが健在だったので見る気が失せた。一段と数を増しているのが癪に障る。

朝から何時間もネットをつけているが、時間の流れは会社に居る時よりもかなり早い。

もう12時になる。また飯の支度をしなくてはいけない。

日本も休日はアメリカみたいにランチにしてしまえばいいんじゃないか？

僕はキリスト教原理主義者でもなければ、プロテストアントでもピューリタンでもないけれど。

日本人がWASPにコンプレックスを持つ日は来るのだろうか。

今でも白人コンプは強いから、これから先もっとひどくなるだろう。

いつも通りの休日、か。

このままだらしなく、この日は終わるだろう。

願わくは明日からもういつもと変わらない一日が始って、終わることを僕は望んでいる。

いつになく切実に。

昔はとめどない厭世感に苛まれて過ごしていた。

でも今は、平和ボケなんていう言葉がもてはやされていた時代が戻ってきて欲しいとさえ思う。

忘れる度に夢を見て脳裏に蘇る地獄絵は、やはり七年前の秋から自分が捨てきれないまま持ち続けてきた記憶の残像なんだろう。

ふと台所で鍋のふたを掴みつつ、立ち止まって考える。
ネット上ではどうして右翼が多いのだろう。

日本のナショナリズムが戦後極端に抑えつけられたことへの反動
だろうか。

お隣の中国では愛国主義者に対する抑止力がないため、暴走する
一方であるという話を聞いた。

だが左翼もまた、健全であると言い難い。僕は強がってもみる。
日本の教育は左翼的である。これは世界に類を見ない。

現代の日本には国民に強制される思想がない。
宗教に関して言えば、日本は江戸時代以来の神仏習合で、神社と寺
を同じものだと信じている人も出てくる始末。それに仏教はいわゆる
神が存在しない。

無宗教という宗教？ 八百万の神々を信仰していた頃の名残？
いずれも今の日本を正しく表しているのか定かではない。

そして、共産主義や社会主義も、国民の大多数に支持を受けたこと
はない、あの国とは違って。しかし我々は義務教育で資本主義万歳
と毎日十回唱える教え込まれるわけでもない。アメリカの様に共産
主義の終焉について世界史でみっちり学ぶこともない。

という具合に、裸電球のぶら下がった六畳間で、僕は久しぶりに似
合わない神妙な顔つきを試してみた。

やはり日本人は、自分たちのアイデンティティとなる思想をなくし
た民族になってしまったらしい。

尤も、昔僕に向かって「どこの国の人間であるか、なんていうアイ
デンティティは必要ない」とか即答した人が目に浮かんだが、彼女
については考えるのを止めた。

僕は愛国主義者でもない代わり、よくいる「日本嫌いの日本人」にもなりたくない。

わざわざ日本の歴史の汚点を論っている輩の気は知れない。そんなもの、どの国にだって一つや二つあるのだ。

じゃあ僕は何主義なんだ？

左翼でもなく、右翼でもなく……。 「無翼」だろうか？

無翼か、良い名前だ。ネーミングセンスは悪いが言いえて妙だ、語感がいい。

僕は決して知的ではない思いつきを気に入って、しばらく悦に入っていた。

しかし結局冷静になった僕はこう思い直すのだ。
自分はどっちつかずの中途半端という、典型的な日本人に落ち着くのだろう、と。

そして、日本人の大半は僕と同じく右翼も左翼もどうでもいい人たちなんだし、何よりまず僕みたいな小市民はこういうことを語るべきじゃない、という身も蓋もない結論に至ってしまった。

それにもう関係なくなってしまうのだ、アイデンティティなんて。

関係ないが、さっきから国際関係とか政治の話をし出したら止まらない、とある友人のことが頭を離れない。

ノートパソコンの前でぼんやりしていると、洗濯ものの取り込みを忘れているのに気がついた。

すると僕が立ち上がるのを阻止するかのよう、に、絶妙なタイミングで鳴る電話。

無機質な電子音と、黄色く光るボタン。

いかにも旧式な固定電話の受話器に、僕はすっかり冷えてしまった指先で触れた。

電話を掛けてくる人物が誰なのか少々期待しながら、大きく息を吸い込んで第一声を発する。

「はい、もしもし」

「もしもし、梶ヶ谷さんのお宅でしょうか？」

「急にあらたまるなよ、僕だって」

「お、その声は優だな？」

「この家僕以外住んでないんだから、他に誰が出るっていうのさ？」

「久しぶり。私がない間、新しい彼女は出来てないんだ」

「あんま調子に乗るなよ、怒るよ？」

高めの声、いかにもキャリアウーマン的なハキハキした喋り方。やっぱり彼女だった。

噂をすれば影が差すとはこのことだ。

「冗談、冗談。ちょっとからかっただけ。相変わらず身持ち固いね」

「僕のことはどうでもいいけど、君はどこにいたんだよ。心配したんだよ？」

「ちよつとそこまで。ねえそれより今から新宿駅近くで買い物でも一緒にどう？」

「いいから、ちゃんと説明して。こんなに長い間どこに行ったんだよ？」

僕は、肩に子器を挟んで作業を続けながら、つい咎めるような口調で尋ねてしまった。

彼女は微妙な間を置いて、キツパリこう言う。

「別に、ちよつと上海まで」

「上海って、また中国？」

「これでもう十回目ぐらいかな、あの町好きなんだよね」

「つか、こんな時期に国外に出てて大丈夫なの？」

「だから今日ギリギリに戻ってきたんじゃない。入国ビザの再申請とか、パスポートのこともあるし」

「さつきニュースで丁度見たよ。成田の方今大変なことになってると思うんだけど」

「こんな大陸あっちと比べれば全然マシ。それに運休とかほざいてる成田エクスプレス乗るの止めて、新宿駅までアッシーにバイクでちょいちよいって乗せてもらったから平気だよ。

てかさー、聞いてよ。ひどいんだよ。向こうで日本に帰るって言ったら『日本人の男は皆スケベだから、襲われないようにね』とか、『あんな亡国嫌になつたらいつでも戻ってきていいのよ』とか、中国の友だちがさ、マジな顔して一斉に止めるのよ。あんまり心配するから、私帰ったら危ない気がしてきちゃって、自分日本人なのに……」

アッシーって、こいつ何歳だと実年齢を疑いつつも、彼女が向こうに浸り切っていることを改めて実感させられた。しかし中国人は我々に対してどんな強い偏見を持っているんだろうか？

彼女は仕事柄、中国と日本を行ったりきたりすることが多かったのだが、最近はある国が気に入ったらしくずっと滞在しているらしい。

「へえ、国際関係の人って大変なのね」

「何でもいいけどさ、今日の午後暇？」

「いや暇ってほどでも」

「こんな昼間から家でパソコンつけてゴロゴロしてる男の、どこが暇じゃないんだ？」

「どうして分かるんだよ？」

「だって優ちゃんの家、家具がFMVしかないじゃん」

「え？ そんなことは……」

「あのさ、今数人別のオトコの子待たせちゃってるし、優ちゃん来ないなら」

「分かった分かった、ごめんよ。今すぐお迎えに上がりますから」
「よろしい。なら私の荷物運びを手伝いなさい」

僕は急いで身支度をすると、畳みかけの衣類を放置したまま、十分もしない内に忙しくまた家を出た。

阿佐ヶ谷から中央線に乗り、そのまま新宿駅を目指した。

いつもなら会社に行くためにしか電車には乗らないので、どうも自然と足がそちらへ向かいそうになる。

住宅街の方は全く人通りすら見かけないのに、新宿駅の辺りからようやく車や人の往来が目に見えて増えだす。

やっぱ東京はこうでなくちゃ。しかし悠長に考え事をしている暇もなく、到着した瞬間に僕は人の波に押し出される形で車輛を降りることとなった。

最初ここに来たころよりは大分迷わなくなっただろう。

いい加減に馬鹿みたいな人の多さにも慣れた。

さあ早く待ち合わせ場所に着かなくては。一時までに着かないと怒るにちがいない。

しかし構内の喧騒をよそに、宗教団体が何やら集会を開いているのが目に留まった。

今日は特別ひどい。他にも号外のビラを配っている新聞屋や、NGOのデモなどにも出くわしたが、全部無視して通りぬけた。

やっとのことで、西口附近のとあるレストランの前に辿りついた僕は、茶色のコートを羽織り、その上にマフラーという半ば冬物のファッションに身を包んだ彼女を見つけた。

背の高い彼女は、意外と遠くからでも目立つ。

「おい、三城いー」

僕が五メートルぐらい離れた所から叫ぶと、彼女は笑顔で手を振り返してきた。

「ホント久しぶり〜、元気してた？」

彼女がブーツの音をカツカツさせながら近寄ってきた。

薄めの化粧に、動きやすいやや短めのスカート。

日頃から接客業をやっている女性にありがちな、営業スマイルとも受け取れるこの笑顔――

やや大人びたが、彼女の印象は一年前とあまり変わっていない。

「なんか日本語喋るのが懐かしい」

「意味分かんないこというなよ」

「だって、周りがみんな日本語喋ってるのって面白いじゃん」

彼女は母語なのに、一つ一つ確かめるように言葉を口に使っていた。しかし大したものである。

普通に会話していると分からないが、彼女はこれでも大学時代、中国留学中は北京語の他に、広東語、上海語、^{びんなん}？南語、潮州語などなど、中国六大方言の三つ以上を僅か二年の内に習得する、という離れ業をやったのけた語学に堪能な女性でもある（因みに中国人でもこれほどできる人はまずいないらしい）。

僕はとりあえず、何だか元気そうな彼女に安心した。

「じゃあ、そろそろ移動しようか」

僕は徐に切り出した。

「そうだね。でももう少し静かな場所がいいかな」

「買い物行くんじゃないの？」

彼女は意味深な表情をした。

新宿駅の入り口には、いつもと同じようにどこから湧き出しているのか分からないぐらいの人が行きかっている。

「いや、買物で終わりにしてもいいけどさ。ほら、人の集まる所ってうるさくない？　今日は特にね」

確かに頷ける。正直なところ、僕は今日あまり外に出たくなかった。

「それに――」

「それに？」

「それに、ちょっと話したいこともあるし。ここじゃ、ね？」

こういう台詞もさうつというのが彼女だ。

「僕は、別にどこでも構わないけど」

突然のことで、こんなことしか言えない僕。

「じゃあとにかく高田馬場まで移動しよう」

「……道分かるの？　もう大分経つでしょ」

「仮にも昔私が住んでた場所だよ？　あの辺モノも安いし」

雑踏の中で、吃驚したような二つの眼がこっちを見つめていた。

言つのを忘れていたが、彼女は早大出身でかつて西早稲田近辺のアパートを借りて住んでいた。

「……だから、修正主義っていうのは必然的に起こるべき出来事だったわけ。毛沢東のやり方とか文革で起きた出来事の大半は間違ってたと思うけど、彼が現代中国を作り上げたであることに変わりはない。まあでも私は、その後改革開放に尽力した？　小平も好きじゃないけど」

僕は今、すっかり秋色になった街路樹を横目に、彼女の現代中国についての基礎知識を延々と授業されている。

ここ通りの紅葉は綺麗だ、本当に。

「いずれにせよ日本は一度西洋列強と共に中国を侵略したわけだから、一部の中国人に日本が嫌われるのは当然。でもそれは中国の過激な愛国主義の裏返しでもあるから、私みたいな一介の民間人があまり気にしてみても仕方ない」

最初興味本位で、中国の実情ってどうなの？ と尋ねたのがいなかった。

こういうのを、地雷を踏む、というのだろうか。彼女に一生懸命歩調を合わせながら傾聴するも、次第に彼女の言うことが僕の理解の範疇を越え始めた。

やはり僕は国際系に疎いのだ。

彼女は道路に落ちた枯れ葉を思い切り踏みつけながらも言葉を途切れさせない。

「全ては第一次アヘン戦争を皮切りに始まる長い長い植民地支配の歴史、更には小国と侮っていた日本に一度は戦争で負けたこと、それが中国にとって日本の黒船ショックのカウンターパートに当るの。要は『弱いと叩かれる』っていう民族的な対外諸国への恐れが、行きすぎた中国のナショナリズムを動かす原動力なんだな。

中国共産党はあれほど広い国土を統治して、50以上いる民族を束ねるために、人民を抑圧する政治体制から抜け出せない。けどそれは元々、概ね帝国主義から中華民族を守るためだったんだ。第一、帝国主義なんて西欧人の……」

グローバリゼーション、欧米礼賛、白人至上主義……。

彼女の話しからは、アメリカや西洋諸国が我々をいかに搾取してきたか、加えて人種差別に対する怨恨などがひしひしと伝わってきたが、「白人大嫌い！」と言わないにしろ、欧米人に対する偏見自体も人種差別だということに彼女は気づいていない。

僕たちは喫茶店に入っても、中国についての話を続けていた。

コートを脱ぎながら、ウェイトレスに注文しながら、砂糖をマグカップのミルクコーヒーに注ぎながらも彼女は喋るのを止めようとしない。

「でも、私も64事件のこととかで目が覚めたかな。やつばここの年、いやもつと前からかもしれないけど、中国共産党はやりすぎた。民主化運動に参加してた一般市民を人民解放軍持ち出して虐殺する

なんて近代国家にあつてはならなかった。上海でも学生が江沢民に大分殺されたつて話しを知り合いにされてから、私大分中国に対する見方が変わったよ」

「天安門事件のこと？」

「そうだよ。もう今から二十年以上前の話になるね」

彼女は壁に接触した長椅子の上に置かれたバッグから分厚いファイルを取り出した。

ファミレスによくある安っぽいテーブルの上で、彼女は広東語の新聞記事と一緒に挟まった写真を広げて見せてくれた。

夜も更けた中ライトアップされたステージ。司会者の声に合わせて、一斉に拳を振り上げる民衆。掲げられた繁体字の並ぶ垂れ幕。

香港で開かれている64事件追悼集会の写真、とのことだった。

日本人なのに、遠路はるばる毎年参加しに行っているらしい。

写真の自分を指さしながら、彼女はたくさんのことを解説してくれた。

ひと際目立つ彼女は、数人の友人と一緒に何故か蟹の上に赤いバツ印が描かれた旗を振っていた。河蟹？全家、とあるが、どんな意味なのかよく分からない。きっと中国政府を揶揄するようなことが書いてあるには違いないが。

左隣で彼女と肩を組んでいる男性は誰だろう。精悍な短髪の青年が、メガホンを片手に叫んでいる。

「今政府は『和諧社会』だとか喧伝してる。でも巷じゃ、そんな陳腐な政府のプロパガンダに振り回される人間はいない。

法輪功は米国政府の手先だった、とか言われることもある。北京奧運オリンピックの時もそうだ。私だってチベットや新疆ウイグルに独立紛争を起こしてほしいわけじゃなし、内戦で中国に滅んでほしいわけでもない。でも弾圧があつたのは紛れもない事実だ。

共産党のやっていることはもうそんなので正当化できるレベルじゃないんだ。孫逸仙（孫文）が『革命未だ成らず』とか言ってた頃と現代じゃ時代が違う」

さつきから、僕は何も分からないまま頷いているだけの様な気がする。

喧々囂々と論争するまでもなく、ただただ圧倒されていた。

何だろう、新興宗教の勧誘を受けているのと同感的に似ている。

「だから、今こそ中国人民は革命に立ち上がるべきだ」

「うん、そうだね」

駅を降りてから、「うん」とか「うん、そうだね」と言ったのはこれで少なくとも百回を越えているだろう。僕は彼女の言動を正しく把握するまでに5、6秒ほどの遅れが出たため、しばらく沈黙を守っていた。

「——っていう一連の話を、中国人の友達にされたんだ。いやー、正直中国人でここまで言うってすごい勇氣あると思うよ。」

私はそういうビミョーな問題に口出しをする積りはない。嫌いなんだ。っていうか私はビジネス専門だから、政治諸々の知識は全部耳学問だし」

今更事の重大さに動揺している僕をよそに、彼女は自嘲気味なほほ笑みを浮かべた。

どこか、遠い昔を懐かしんでいるかのような口ぶり。

「ああ、彼はね、延っていう人で、留学時代以来の友達。私はいつも阿延イエレンさんと呼んでる。追悼集会も阿延が最初に行こうって言いだしただんだ。」

心配しなくても、私は当分彼とは会う予定がないから大丈夫だよ。どう？ 驚いたでしょ。ちょっと焦ったりした？」

つかの間僕は茫然として言葉を失っていたが、彼女は拍子抜けしたように僕の顔の前で手をひらひらさせた。

「優ちゃん、生きてる？」

「いや、ごめん。あんまりにも勢いよく色々言うから、ボーっとしてた」

僕はずり落ちそうになっていた眼鏡を慌てて元に戻した。

「にしてもこれだけ語れるなんて、中国のことすごく詳しいと思うよ？」

「いやいや、絶対そんなことないって。全部阿延のおかげ。彼の父親、それから祖父が広東省出身で香港に二十年ぐらい住んでたっていうのが、多分一番そういう反体制的な影響与えてるんだと思うけど。彼のお祖父さんぐらいになるとまだ香港は返還前だし、全盛時代じゃないかな」

白い湯気の出ている紅茶のティーカップを握って指先を温めながら、僕は肝心の質問をしようと試みた。

「で、彼はボーイフレンドなの？」

「んー、阿延は『男性朋友』おとこともだちだね」

「中国語で言われても分からん」

彼女はまだ頭から中国が抜けきっていないんだろう。

言葉の面でも、そして、拠り所にする思想の面でも。

「イエスカノーで答えるなら、当然ノーだな。嫉妬した？」

「特に何も思わないけど」

「素直じゃないね」

僕は苦笑して、隣のビルの隙間から覗く青空を窓ガラス越しに見上げた。

こうしていると、まるで結婚して二、三年は経った夫婦のようだ。

僕たちはその後暫く談笑して、漸く外へ出た。

もう二、三時間ほど経過してしまつたらしい。陽は傾き出し、オレンジ色の光に照らし出された電信柱の影が長くのびていた。

乾いた空気は若干冷たく、手の感覚が少しずつなくなってきた。

「ねえ？」

「ん？ どうかした？」

「初めて会つたのって、いつだったっけ？」

「さあ、ちょっと思い出せないな」

僕は、道路のタイルを靴がはみ出さずに踏めるかどうかの方を気に

しながら、話に耳を傾けていた。

早大早稲田キャンパス近くにある商店街。

前来た時は、オープンキャンパスの時期だったということもあって、風変わりな格好をした学生たちが行進していたが、今日もその手の集団を見かけた。

さして珍しい光景でもない。何やら物々しい雰囲気漂っているのを除けば。

遠くに変な洋風の時計塔も見えた。多分あれも大学の一部なんだろう。

「高一、高二とでクラス一緒だったけど、一年の時って別に全然喋らなかったよね？」

「そうだなあ」

「二年の一学期くらいだっけ？」

「やっぱりよく覚えてない」

「何が切っ掛けだったっけ？」

風で乱れたショートカットの髪をかき上げる彼女の耳には、真珠のピアスが見えた。

「確か、優ちゃんも私と同じで本の虫だったから、図書室に毎日のように来てたはず」

「その言い方はないな」

僕は腕を組んだまま、首だけを彼女の方に向けた。

「年間の貸出冊数ランキングで一位だった回数、結局君に勝てなかった」

「お互いさま、って言った方がいいと思いますけど？」

「まあ何でもいいけど、僕にとって高校生活はあまり良い時代じゃなかったな」

高校生だった頃。

煩わしいと感じた部活動も、眠たかった授業も、今なら好きになれるかもしれない。

でも当時は、何もかもが時間の無駄としか思えなかった。そういう

年頃である。

友達も少なく、基本的に単独で行動していた僕は、新刊案内に出ているベストセラー作家の本から、埃をかぶってる古書まで、暇さえあれば片っ端から図書館に置いてある本を耽読していた。

「そうかあ。でも私にとっては、最終的には充実した高校生活だったかな、と」

あまり女子とは交流がなかった僕と比べて、男女問わず誰とでも気軽に話す彼女はクラスでも人気ものだったし、僕と対極の位置にいる様な人だったんじゃないか？

SFファンタジー小説ばかり読んでいた僕と比べて、昔から調べ物好きで喋るのが好きだった彼女は、とにかく新書やら啓蒙書やらたくさん借りていた。

そういえば昔彼女に「架空の世界について書いた小説なんか読んで、現実生活の役に立たないじゃない」と言われて、本を読む意義について喧嘩したこともあったっけ。

いずれにせよ、年間の貸出冊数ランキングでも、一位のところには大体彼女の名前——そうじゃない時は僕の名前——があった。

走馬灯のように回想されるかつての日々。

彼女との出会いについて思いを巡らせる内に、僕は芋づる式に重大なことを思い出した。

「っていうか、割と波瀾万丈だったんじゃない？ ほら、二年生の秋なんて……」

喋りながらも既に、しまった、という言葉が頭の中を駆け巡り、僕は思わず口を手で押さえた。

本当にうっかりしていた。僕はつい、忘れかけていた記憶の欠片を拾い上げてしまった。

「もう、それは言わない約束でしょ」

苦笑いを浮かべて上手くごまかす彼女を見ながら、僕は内心忸怩たる思いだった。

この話だけではしない、というのが二人の暗黙の了解になっていたからだ。

「でも皮肉よね。あの辺りからじゃん？　優ちゃんとともに話すようになったのって」

「確かに、そうだね」

「事実上あれが切っ掛け、かな」

吐き出すように呟いたまま、彼女は沈黙してしまった。

僕は静かに頷くしかなかった。背中には薄ら脂汗の感触があった。

七年前、つまり僕が高二の時。

十月二十六日早朝、僕たちは付き上げるような激しい揺れと共に目を覚ました。

三十年以上前から懸念されていた東海・東南海地震が、とうとう発生したのだ。

僕の家も含め、大半の家屋は倒壊。学校のような丈夫な造りの建物以外は、火災の影響もあいまって甚大な被害を受けた。

幸い親族や知り合いに死者は少なかったが、僕の高校でも合計29人の生徒が亡くなった。

何も変わらないし、何も変えられない。

そう思っていた僕たちの変わらない日常は、突如として奪われてしまった。

僕たちの周りに存在していたたくさんのものはその意味を変えて、急に残酷な試練を突き付けてきた。

そうだ。彼女は、沿岸部に押し寄せた津波で仲の良かった先輩を一人亡くしている。

成績は常にトップクラスで、性格や運動神経何一つとっても非の打ちどころのない人だった、というのは後で人づてに聞いた話だ。

僕が知っているのは、災害から三週間にも関わらず敢行された十一

月の期末試験の帰り、図書館のカウンターに来た彼女が、何も言わずに机につつぶして泣き出したということだけだ。当時借りられるアパートが見つからなかった僕たち一家は体育館に寝泊まりしていたので、時間つぶしに夜遅くまで図書館にいたことが多かった。その時図書館には僕と司書さん以外に誰もいなかったから、気が緩んでいたのかもしれない。教室でテストを受けていた時も、廊下で友人たちと歩いているのにすれ違った時も全く平気そうな顔をしていた彼女。

その彼女が、僕の前でだけ大粒の涙をぼろぼろ流した、というのが俄かに信じられなかった。でもそれは、僕の脳裏に焼き付いている紛れもない事実だ。

僕は一気に重くなった雰囲気改善しようと、脱線した話を元に戻した。

「いや、最初に会ったのつてもっと前だよね？」

「まあそうだけど」

「確か、放課後図書館で本を借りようとしたときだった気がする。きつとそうだ」

「んー、そうだったっけ？」

いつも聞き手に回ることの多い僕が、今回ばかりはよく喋った。すると、彼女が閃いたという顔をした。

「あつ……」

「何？ 思い出した？」

しかし、彼女の表情はいま一つ冴えない。バッグを持っていない方の手で頭を押さえつつ、彼女はキツパリこう言った。

「図書館で世界史の予習してた時だ。優ちゃんが司書さんとお喋りしてる所に、休憩ついでに来た私が近代ヨーロッパ史関係の小説を借りてこうとしたんだ」

「アルフォンス・ド・テ著、『月曜物語』だったね」

「えーと、普仏戦争でドイツに割譲されたアルザス地方を描いた話

しだと思っただけど？」

「そう。で、優ちゃんはその時カウンターで本を借りようとしてた私を呼びとめて、色々説法してきた。『アルザスは当時フランス語を喋ってなかった』とか、『この小説は国語イデオロギーに利用されただけ』とか」

「僕にもそういう時代があったわけ。あの頃はまだ青かったな」

「最初は、何この男子って思っただけど、話してる内にいい人だということは分かった」

「それは僕が一番よく知っているよ」

高らかに笑う僕を、彼女はいかにも訝しげに見つめていた。

しかしなぜか、彼女の目はまた直ぐに悲しげに眦へと戻っていった。

「一番有名な短篇の題名、ってさ」

「ああ、『最後の授業』だよ。前まで小学校の教科書に載ってたよね」

「最後の授業、か」

彼女は何でもない小説のタイトルを、感慨深い面持ちで重唱した。

「なんか、最後っていう言葉つけると、全部特別な意味に聞こえるよね」

再び黙り込んだ僕たちの中で、先に口を開いたのは彼女だった。

すぐ近くのコンビニの灯りが差し込む歩道に立ち止まって、ぐるりと旋回した彼女は僕に近づいてきた。

「あのね、私、あの人が死んでから、誰かに依存するのを止めようと思ったんだ」

あの時のように、彼女の顔は涙で濡れてはいなかった。

今の彼女の顔にあるのは、どんな辛さをも覆い隠してしまう微笑みである。

「帰国したらまず優ちゃんに会って、東京で身辺整理と他の知り合いへの挨拶済ませて、その後お墓参りしよう、って飛行機の中で考えてたんだ。」

これからはずっと大陸で暮らすよ。上海は近代都市だし、日本人コミュニティもあるし、頼れる友だちもたくさんいる。優ちゃんもここちへ来たら歓迎するよ？ よく日本のテレビで映ってる東方明珠電視塔だけが上海じゃないんだから。外灘とか豫園の辺りとか楽しいとこ一杯あるよ」

僕は口を真一文字に結んで俯いたまま、何を言っているかわからずにいた。

ここに来てやっと、少しだけ悲愴な表情を見せる彼女。

「もう今年で七回忌になるからね。いい加減、彼のこと忘れなくちやいけない」

「無理に忘れなくてもいいさ」

「でも、もう今年でここに来るの最後にしようと思うんだ。最後の日本。いい区切りになるし」

「そんなこと言うなよ」

妙にトーンを上げて快活に喋る高い声が、耳に着いた。

「日本に帰ってこなくなったら、君の顔もう二度と拝めなくなるじゃないか」

「けど、もう思い出したくない。高校のあの時からずっと彼の背中を追って生きてきたけど、いつまでも影に付き纏われてるような生き方は終わりにしたいんだ」

一つ一つ浮かび上がっては、沈んでいく光景。

体育館で校長が追悼文を読み上げるのを、聞き終わらない内に泣き崩れる三年生。

校門に押し寄せる新聞やテレビの取材。

そして、顔や行動には出さずとも、半ば放心状態だった彼女。人が死ぬのなんて珍しくない。

長い人生なんだから、いつかは出くわす。これがその最初なんだ。そう思っていた。

『一度でいいから、他人を自分のために狼狽させてみたかった』――

彼が病院で死ぬ間際口にした、最期の言葉。

たったこれだけの言葉を残して、わずか18歳でこの世を去った彼。

彼の死後、彼女はとり憑かれたように勉強するようになった。

以前よりも他人に厳しくなった、そして何より隠しきれない絶望や後悔が彼女の心を着実に蝕んでいるのは分かった。

僕は時たまくる彼女の悩み相談に乗るようになった。クラスの人間関係と隔絶されている僕は、話しやすかったのかもしれない。

それに当時は僕だけが、彼女に突き刺さる様な自責の念を告白されても、平気で受け止めてやれる人間だったんだろう。

図書委員だった僕は、時には司書さんと一緒に、些細なことでもめたり、意味もなく何時間もだらだらとだべったりもした。どれも僕にとって大切な思い出である。

「けど今の私には、向こうでの生活ができた。

決して平坦な道じゃない。中国と日本は体制が違う。仮にも昔は完全に共産主義と資本主義で完全に決裂してた国同士なんだから。台湾みたいな例外除いて、決して親日的な人間が多いとは言えないし。でも私は、文化や言語の違いを乗り越えて、新しい人生を切り開いていきたいんだ。こういうことを日本人がやるっていうのには、まだまだ価値があると思う」

心を打つ力強い言葉だった。

道路の間にある狭い歩道に仁王立ちして、そう宣言する彼女。

僕は、自分が言ったら陳腐になってしまうこのフレーズに対して、皮肉をこめて言い返した。

「この状況で、日本万歳、とでも言う積り？　どこの国の人間かっていうアイデンティティなんて必要ないんじゃないの？」

「そうだったね、どんなに外国語たくさん操っても、結局私は日本人であるわけだ。

あーあ、今日がどういう日なるべく意識しまいと努力してたんだ

けど、やっぱり無理みたい。大人になってからもこういう感傷ってるんだね」

彼女は苦笑しながら、僕の顔をゆっくり覗き込んだ。

もう立派な「働く女性」になった。

お互い違う大学に入ってから、僕たちは地元から離れて同じ東京にきているという縁もあつてか、よく会って話したり買い物に出かけたりしていた。

「いやさ、最後に優ちゃんに『ありがとう』を言いたかったんだ。あの時優ちゃんがいなかったら、って考えると、ね。これで本当に最後になっちゃうから」

彼女はそう言つて、白色のフェンスに寄りかかって西の空を見上げた。

僕は、汚いビルの壁に寄りかかりながら、彼女の言葉を静かに噛みしめていた。

通りを照らし出す夕陽の赤い光が、僕たち二人を包みこんでいた。日本で見える、最後の夕焼け。

茜色に染まった雲が棚引き、遠く第二東京タワーの上空には一番星があつた。

倒壊してしまったもう一つの方は、今跡地が祈念公園になっている。

「もうそろそろ、今日ここに来た理由を言ってもいいんじゃないかな？」

ずっと聞きたかつた質問を、やっと口にすることができた。

「——今日は、特別な日だから」

「僕にとって？ それともこの国にとって？」

僕は反動をつけて勢いよく立ち上がると、彼女の隣のフェンスに同じように寄りかかって、肩を並べた。

冷たい空気に包まれて、僕たちは互いの体を寄せ合った。

「半ば日本を捨てた私には関係ないと言いたいけど、何か寂しいよね。この雰囲気って、返還前夜の香港みたい。未だに明日から祖国を失うなんて信じられない」

「でもこれで、ホントに終わりなんだ」

明日から日本は主権をアメリカ合衆国に移譲し、経済特区として編入されることが決まっている。

十年前、天文学的に膨れあがった借金によって引き起こされたハイパーインフレ。

そして追い打ちを掛けるように日本各地で発生した大震災、それに次ぐ経済破綻――

相次ぐ災難に、なすすべもなく歩んだ末路がこれだった。

政治や経済、軍備、日常生活のあらゆる面で我々は変革を要求されるに違いない。日本人はこの先長らく、苦難の時代を迎えるであろう。

今日は、日本最後の日だ。

「明日から、久しぶりに二人でどこか出かけよっか」

僕は自分のマフラーを、彼女の首に巻きつけると耳元で囁いた。
「うん」

彼女は本日一番の、作り笑いではない心からの笑顔を見せた。

今週の週末の予定は、いつになく充実したものになりそうだ。

（後書き）

返還前夜の香港って、どんな感じだったんだろう。

追記：これを読んだ中国の方へ。

私は決して中国共産党がこの地上から消えてなくなれとは思っていません（中国が政情不安になれば一番被害を受けるのは日本です）。あなた方の政治体制に口出しをする積りはありません。

この話は中国と日本という二つの国の間で揺れる日本人の心を描いた作品です。相反する政治体制、歴史的に複雑な背景を持つこの二つの国は、御互いの国に携わる多くの人間を悩ませてきたでしょう。私もその一人です。

日本人が中国人不法滞在者に文句を言う気持ちもわかるし、中国人が日本の過去を非を論って反日デモをやる気持ちも分かる。

ですがもし不快になったら申し訳ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6532j/>

とある週末。

2010年10月22日10時14分発行